

中長期目標 (学校ビジョン)		夢や希望に向かい 自分らしく輝いて たくましく生きる力を育む。			今年度の 重点目標	1 学習指導・授業改善に努める【授業実践の充実】 2 児童生徒の健康と安全を守る【QOLの向上】 3 「チームとりよ」を推進する【連携・協働】 4 業務改善に取り組む	《キーワード》 「可能性」
年 度 当 初							
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	到達状況	評価	改善策
1 学習指導・ 授業改善に努める【 授業実践の充実】	小学部	○自分らしさを発揮し、願いを抱き意欲的に学ぶ授業づくり	○感染症予防対策を徹底した上で、日常的に授業を見る機会を設定し、学び合える環境作りが必要である。 ○教材教具や学習環境の不具合に気づいても、物品の確保や改善に時間がかかるため、そのままになっていることがある。	・教師が他クラスの実践を参考にしたり、教材や教室環境を改善したりしながら授業実践する中で、児童が自分らしさを発揮しながら学習している。	・学部の勉強会を副学部長が中心となって企画する。 ・学部長が教材教具や学習環境の不具合を聞き取ったり、気づきを書き込む用紙を回覧したりする。 ・学部長が中心となって、改善事例を記録する。	学部の勉強会や学部研、グループで学習する際に、他クラスの実践を知ることができた。 教材教具の不足や教室環境の不具合については、改善を心掛けることができた。	B ・クラスの実践を報告する勉強会を継続する。他クラスの教室に入って実践を参観できたという声は多いが、難しい状況である。廊下掲示や学級通信、学部通信などの写真等を通して、他クラスの実践を参考にできるよう掲示方法や通信の保管方法を工夫する。
	中学部	○一人一人の課題や教育的ニーズに応じた授業づくり	○実態把握のもと教育的ニーズを共通理解効果的なICT活用や教材・支援、授業展開の工夫など、継続して取り組み、主体性を促すとともに学習の理解を深める必要がある。	・いろいろな学習に、興味や関心をもって、生き生きと意欲的に取り組んでいる。仲間や教師とかわり合う中で、さらに発展向上しようとしている。	・教師間で、放課後等に授業づくりや生徒の成長を話題にし、頻繁に情報交換を行う等、生徒の実態把握や授業の充実に努める。 ・教材の工夫や体験・集団活動の工夫、体験・集団活動等にICTを活用する等、授業の改善・充実に努める。	・単一会、重複会で生徒の様子や授業づくりについて情報共有したり話し合ったりして教材や単元の工夫に努めた。生徒は様々な活動に興味関心をもって意欲的に取り組みつつある。 ・オンライン見学やオンライン交流会等、ICTを活用して、生徒の実態に合った学習内容を計画し、見直しを持って取り組むことができた。ICT研修を行い、授業実践例等、活用方法を共有できた。	B ・学部会、単一会、重複会、子どもを語る会の内容、進め方等を工夫して、生徒の情報共有や授業づくりの充実に務める。 ・ICTの活用や授業づくりについて研修等を計画し、日々の実践にいかす。活用事例を学部内で共有する。
	高等部	○キャリア教育の視点に立った授業づくり	○キャリア教育の視点について学部会で確認し、単一会、重複会等で授業やそれぞれの課題について話し合う機会を設けている。内容によって会のメンバーや方法を工夫しながら開催していく必要がある。	・学習に意欲的に取り組んでいく中で、キャリア教育の視点に立ったそれぞれの「つきたい力」を身につけようとしている。	・キャリア教育について共通理解をする機会を設ける。単一会、重複会や子どもを語る会等を月1回以上開き、情報交換をしながら授業改善に努める。	・年度当初にキャリア教育の視点にたった「つきたい力」について具体的に共通理解をした。 改善の余地はあるが、年間を通じてニーズに応じた会を月1回以上設け、情報交換や授業検討、勉強会などをすることで授業改善につながった。	B ・現在できていることを継続しながら、生徒の変容に着目した授業改善の評価をし、さらなる改善に努める。
	教務部	○学習に関する諸計画の在り方についての整理	○昨年度職員アンケートをとり、作成している諸様式の課題や改善点についてまとめた。 ○諸計画の様式の改訂に向けて必要な研修や共通理解の会を計画的に行う必要がある。	・児童生徒への指導の大元となる教育支援計画と個別の指導計画のつながり、評価について整理され、新様式の様式が作成されている。	・とりよまなびのプロジェクトで、改訂に向けて取り組む内容について関係する分掌と検討・整理を進める。 ・諸計画の見直しについて、改訂するポイントやメリットについて共通理解の会を開催する。 ・他校の情報も収集し、本校で活用しやすい様式を考案する。	・教育支援計画の素案についてまとめた。実際の運用に向けては、目標や支援内容を設定するにあたり、子どもたちの卒業後の姿を教員がイメージできる必要があることや本校のここら・からだ・せい・かづの視点についてしっかりと理解することも必要であるなどの課題も明確になった。 ・職員への提案は、運用に向けた研修計画や作成時期など今後のスケジュールについて立案でき次第行う予定。	B ・子どもたちの卒業後の生活における現状や課題などを踏まえて、教育支援計画の目標や支援内容を設定できるよう、キャリア教育の視点での共通理解の研修実施を行う。 ・作成にあたり、各項目に必要な視点を示した記入例を作成し、提示する。 ・キャリア教育部、自立活動部、研究主任、エキスパート教員と連携し、諸様式の整理を行う。
	研究研修部	○主体的な学びを育む授業づくり	○関係する分掌と連携を図りながら、計画的に研修を行ったり、本校の授業づくりや「合わせた指導」における年間指導計画の修正に取り組んだりする必要がある。	・児童生徒が主体的な学びを実現することができるよう、児童生徒の学びの姿を3観点での目標設定や評価に具体的につなげた授業改善や年間指導計画の作成が行われている。 ・グループ研究会の時間を有効に活用しながら、授業改善に向けての話し合いや年間指導計画の作成を行う。 ・研修2回 ・校内授業研究会各1回(単一・重複)	・児童生徒の主体的な学びの姿をイメージし目標設定や評価に活かすことができるよう、学習指導要領に関する研修を講義と演習を組み合わせたり、授業研究会の実施の仕方を工夫したりする。 ・グループ研究会の時間を有効に活用しながら、授業改善に向けての話し合いや年間指導計画の作成を行う。	・校内授業研究会では、児童生徒への共通理解に基づく授業実践や、3観点での目標設定や評価について具体的に学び合うことができた。 ・グループ研究会の時間で取り組む内容やグループ編成を工夫することで、学部間での学びの系統性について話し合うことができたが、年間指導計画の改善にまでは至らなかった。 ・研修動画を活用した研修2回、教科教育に関する実技研修3回実施 ・校内授業研究会各1回実施(単一・重複)	B ・今後も、日々の授業実践に生かせる研修や授業検討会の実施方法を工夫する。 ・年間指導計画の作成を行うための話し合いや作業に取り組む時間を計画的に設定する。
自立活動部	○児童生徒の実態に応じた、自立活動の適切な目標設定と指導内容の充実	○単一学級の児童生徒の目標設定において、チェックリストが作成されたので活用することが課題となっている。 ○職員の専門性向上のための研修が必要である。	・自立活動目標設定シートを活用した目標設定について、7割以上の職員が「昨年度より理解できた、もしくはスムーズだったと感じている」。 ・主催した各種研修会の内容が、教職員にとって日々の授業実践に役立つものであったと感じている。(7割以上)	・自立活動目標設定シートの活用に関する研修を開催する。また、目標検討会時に自立活動部員が助言ができるようにグループ編成を工夫し、アンケートを実施する。単一学級においては、児童生徒に応じたチェックリストを活用できるようにしていく。 ・MANABIを年4回以上発行するとともに、とりよ夏季セミナー、お役立ち勉強会等、実践に役立つ研修会を年5回以上実施し、アンケートをとる。	・単一学級において、自立活動チェックリストを活用した目標設定をすることができた。目標設定シートの理解度について、アンケート実施まではできなかったが、昨年度までより目標検討会がスムーズに進んでいる。 ・夏季セミナーをリモート形式で行うなど、予定していた研修会は実施することができた。研修内容においても「呼吸」に関することなど、これまで扱えなかった内容にも取り組んだ。アンケート結果も8割以上の職員が実践に役立つと答えている。	A ・適切な実態把握を行うためのツールとして、自立活動チェックリストの活用を進めていく。より多くの職員が理解度を深め、根拠ある目標設定ができるよう充実した研修体制も整えたい。 ・引き続き、職員の専門性向上のために研修会を行っていき、事前アンケートなどとり、研修内容についても「呼吸」に関することなど、これまで扱えなかった内容にも取り組んだ。アンケート結果も8割以上の職員が実践に役立つと答えている。	
情報教育部	○ICTを活用した授業実践の推進と充実	○現在使用しているアプリに加えて、ニーズが高い教育関連に関するアプリ、Google suite、Google meets等にも対応し、遠隔授業等にも活用できることが喫緊の課題となっている。	・遠隔による授業、会議、課題対応等に対応したアプリの操作を行うことができる教員が8割以上となる。	・関係機関と連携し遠隔による授業、会議、課題対応等に対応したアプリに関する全体研修会、個別も含めたミニ研修会(お役立ち勉強会)を実施する。 ・iPadを使用した遠隔による情報発信、テレビ会議等の実践例の紹介を行う。	全体研修会、個別の研修、ICTの活用実践を通じて遠隔授業(89%)や学習等の連絡(80%)に活用できる教員が増えてきている。	A Google関連のアプリの更新が早いので、新しい知識が必要とされる状況が続いている。研修方法の工夫と、焦点を絞った研修会を実施していく。	

2 児童生徒の	全学部	児童生徒が安心して学べる環境作り	<p>日常の児童生徒の心身の状況について情報交換、情報共有する体制ができてきている。しかし、新型コロナウイルス感染症への対応等、絶えず情報を更新しながら当たる必要がある。また、学部全体で児童生徒を見ていくような組織的な体制作りも必要である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・衛生管理、室温等学習に適した教室環境ができている。 ・児童生徒の心身の状態の変化について関係職員が共通理解し、適切に対応している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・清潔で安全な環境づくりについてポイントを適宜周知する。 ・清掃、消毒等感染症対策マニュアルに沿って正確に実施する。 ・児童生徒の実態に応じた環境改善について職員で情報交換をする。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・普段の清掃しない箇所の汚れに気づくことができるよう、定期的にマットの下やエアコンの様子を確認する。 ・気付いたことがあった際は学部主事や養護教諭に相談し、速やかに対策を取る。
------------	-----	------------------	--	---	--	---	---

健康と安全を守る【QOLの向上】	保健安全部	○児童生徒が安全に快適に学校生活を送ることができる環境整備と体制づくり	○昨年度は新型コロナウイルスの為、予定されていた研修や訓練が予定通りに実施できず、現状に応じた活動となった。例年通りの開催とならなかったことで、新たな取り組みができたり、検討事案が明確となった。○校舎増築や工事に合わせ、安全で健康的な学校生活を送ることができるように、救急体制や感染予防対策等、今後の危機管理についての周知徹底を行っていくことが必要である。	○個に応じた緊急救急体制が学級・学部・学校で共通理解され、危機管理意識を持ちながら支援する中で、児童が安心して学校生活を送っている。	・ヒヤリハット事例を各学部で周知したり、研修や各種訓練、救急・防災ウィーク等での課題を取り上げたりして、安全面・健康面に留意した対応を行う。 ・「今後の鳥養の防災の在り方」での案件を検討し、救急体制を決定する。 ・総務と連携して防災委員会を開催する。	・全教職員が危機管理意識が持てるよう、ヒヤリハット事例を掲示板で迅速に報告したり、学部会で注意勧告したりしたことにより、「危機管理意識が向上したか」という教職員への問いに対して肯定的な回答(100%)をいただいた。又、定期的に周知したことで、事故を未然に防ぐことができ、事故防止へと繋がった。緊急対応カードを更新し、校内救急体制を整備することができた。 ・避難経路や避難方法、必要物品等を児童生徒と一緒に確認し、各学部分散での避難訓練を実施した。目的を明確にして避難訓練を行ったことで、新たな成果や課題が出てきた。今年度もコロナ感染予防により全校一斉での訓練ができなかったため、一時避難、児童生徒の心のケア等の対応は十分ではない。安全な避難ができるように総務や各委員会、防災委員会等での十分な連携が必要である。	B	・学部会や掲示板活用でのヒヤリハット事例の取り上げを継続し、詳細を分析しながら事故防止の徹底を行う。 ・防災対策については、総務部と連携を深め、業務分担しながら、災害に備えた環境を整えていく。 ・安心、安全な活動を行う為の教育体制については、普段から防災意識や緊急時の対応意識が持てるように啓発し、来年度以降の方向性を示していく。
	小学部	○保護者や関係機関と連携した指導支援の充実とクラスを越えた協力的体制づくり	○個人情報に留意しながら、回覧・PC上の保存情報共有の仕方を工夫することが必要である。 ○グループ学習や授業を見合うこと等を通して、お互いの授業力を高め合う機会を増やすことが必要である。	・小学部児童の学習・生活の目標や課題について一覧するシートを作成し、小学部職員間で共有する。 ・他クラスの児童の様子を知ることができるよう、余裕がある場面で隣のクラスの補欠等に入るようにする。 ・授業の様子の写真を共有する。	・学習の様子分かる工夫をした掲示が増えた。研修会や学部会を通して、児童の様子を共通理解することができた。 児童の支援目標等を参照することのできるエクセルシートを作成したが、支援目標を参照し他クラス児童の支援に活かすまでには至らなかった。	B	・学部会や学部の研修の際に、児童の支援目標や指導目標について短時間でも確認するよう取り組む。支援目標等の一覧シートを活用しやすいものとなるよう改善する。	
	中学部	○自己実現に向けた指導・支援を行うための連携の在り方	・コロナ禍での進路学習について、さまざまな状況を想定した学習内容を考え、計画的に実施することが必要である。 ・生徒本人や保護者のニーズを聞き取り、必要な情報提供を行うことが必要である。	・進路学習とおして将来の姿をイメージし、今すべきことを教師とともに考え実践しようとしている。	・生活年齢に応じた対応を行うとともに学年が上がるに促し、社会参加をより意識した取組を心がける。 ・生徒一人一人の病気や障がいの状態や特性に応じた適切な支援を行うために、保護者・関係機関との連携を深める。 ・進路指導主事と連携して、個々の実態を踏まえた進路学習(合同、個別)を計画し、実施する。	・卒業後を見据えた学年別の進路学習を計画し実施した。職場見学はオンラインで行いその後校内作業実習を行った。生徒は学習を通して将来への意識が高まってきた。進路希望調査用紙の配付や個別に進路懇談も行った。(単一) ・保護者と相談し実態に応じた施設利用体験を実施できた。懇談等で進路に関する話ができて、ニーズに沿った対応を行った。生徒は、それぞれの進路学習により将来の生活について意識することができた。(重複)	B	・今年度の進路学習を引き継ぎつつ、さらに内容を充実させる。今後もコロナ禍でも取り組める内容を検討し、保護者・関係機関との連携を図りながら計画的な進路学習に取り組む。 ・生徒や保護者のニーズを聞き取り、情報提供をしたり学習に取り入れたりする。
	高等部	○確かな進路実現に向けた支援体制づくり	○個々のニーズに応じた情報の収集をし、それぞれの進路に関して、適切な指導や支援ができるように努めている。	○個々のニーズに応じた進路情報をもとにした体験等を通して、生徒が希望する進路実現に向けた学習に取り組んでいる。	・より適切な進路指導ができるように、進路に関する情報共有の場を年4回以上設ける。 ・個々の進路に応じた具体的な計画やスケジュールをもとに、保護者や関係機関と連携をとりながら、適切な進路指導を進めていく。	・進路指導主事を中心に、進路に関する情報提供を学部全体で7回、個別には随時行った。その情報を生かしながら、進路指導に努めた。 ・進路に関して保護者との共通認識に努めているが、十分とはいえない面がある。	B	・進路指導は小学部から始まっているという認識にたち、卒業生の保護者や外からの関係機関とも連携しながら、保護者啓発に努める。また、理解を深めることができるような情報の伝え方に留意する。
3 「チームとりよう」を推進す【連携・協働・業務改革】	支援部	○地域におけるセンター的機能の充実 ○一人一人のニーズに応じた校内支援の充実	○感染症予防の観点から、例年行っている研修会を教育相談に代えて行ったり、教育相談に向くことができない時はやむを得ず延期、中止したり、リモートで実施したりし、地域のニーズに充分応えることができなかった。感染症等の状況に合わせて、できる形を工夫して地域のニーズに応える必要がある。 ○ニーズに応じて関係機関と連携を図り、外部専門家から適切な支援の仕方について学んだり、支援会議等で適切な支援について検討しているが、その後の経過についてや再検討の必要性などの把握が十分でない。	・エキスパート教員や学部主事等と連携し、適切な支援方法の提供や就学相談を行う等、地域のニーズに応えている。(地域支援) ・一人一人のニーズに応じて、関係機関等との連携を図り学んだ支援方法等や、検討した取り組みが、日々の指導に活かされている。(校内支援)	・地域の病弱・肢体不自由学級の担任のニーズに合った研修会を行う。 ・教育相談で使用できる、本校の児童生徒の学習の様子がわかるような動画を作成する。 ・関係機関との連携を図り、学んだ支援方法等を活かした取り組みの様子や、関係者が検討した取り組みについて、その後の経過を把握し、必要に応じて再検討する。	・事前にアンケートをとる等地域のニーズを把握して研修会の持ち方、内容を設定した。研修会の中に情報交換の場を設けることは、支援学級の先生方の困り感やニーズを伝え合うことができ有意義だった。 ・記録の回覧や学部会での紹介等、関係機関との連携について共有することができたが、連携後の進捗状況の把握や連携の詳しい内容については十分でない。	B	・研修会の内容や様子について校内の職員に伝えたり、参加者のニーズに合わせて研修会への参加を呼びかけた。する。 ・分掌部会で、関係機関との連携について共有する。 ・学部の校内支援担当が相談の窓口であることを全職員に伝え、気軽に相談ができる体制を作る。
	文化部	○全校・全職員の共通理解の下、感染症対策を取りながら、わくわくフェスタを安全かつ効率的に運営する。	○随時、情報発信に努め、情報共有・共通理解を図ることができた。しかし、実際の運営面では、例年とは異なる取り組みをする中で、予想外の事態も生じ、スムーズにいかない場面があった。	○わくわくフェスタ全体の流れや担当する仕事内容を把握しながら、安全かつ効率的に運営したり、発表したりすることができたと全員の児童生徒職員の7割以上が感じている。	○わくわくフェスタに関する情報を分かりやすく整理した上で情報共有データベース上で適宜提供し、全職員で早くに共通理解する。	アンケート結果から7割以上が、適宜、情報発信に努め、情報共有・共通理解しながら、概ね安全かつ効率的にわくわくフェスタを実施できたと感じている。ただし、分散開催のため、各会場の状況が分かりにくい面もあった。また、単一学級は発表までの待ち時間が長かったり、動画の保存が徹底しなかったりなど課題も残った。	B	・分散開催となった場合に各会場の状況を把握するとともに、午後に有効に過ごすために、リハーサル及び当日の発表を録音し、分かりやすい場所に保存する。 ・単一学級の待ち時間解消のため、授業の実施も検討する。 ・各担当者は、次年度への引継ぎ事項を記録に残す。
4 業務改革	キャリア教育部	○本校の進路・キャリア教育の取り組みや収集した情報の発信	○コロナウイルス感染症に対応した職場体験・施設利用体験の実施方法を検討し、準備を進める必要がある。 ○本校のキャリア教育の基本的な考え方について理解するために、教職員研修を行った。キャリア教育参観日に合わせて、進路に関する情報提供を実施したが、年度末の保護者による評価が低かった。	・進路の流れやキャリア教育・人権教育の基本的な考え方について教職員で共通理解し、実態に応じた目標を意識して指導をしている。 ・卒業生の情報、福祉サービスの状況等、進路・キャリア教育に関する情報発信に努め、保護者の肯定的評価が80%以上となる。	・校内研修(全体、学部等)を2回以上計画し、進路、キャリア教育について教職員の共通理解を深める。 ・教職員、保護者への情報提供の方法を整理し、支援部と連携して保護者へ必要な情報が伝わるよう工夫する。	・校内研修を3回(キャリア教育研修会、人権教育研修会、学部別研修会)実施するとともに、職場体験、職場見学、施設利用体験について情報交換することで教職員の共通理解が深まった。 ・保護者対象のキャリア教育研修、座談会を実施して情報提供するとともに、進路に関するものでは、生徒、保護者のニーズに個別に対応してきた。保護者による学校自己評価アンケートの進路に関する項目の肯定的評価は61%であった。	B	・校内研修の内容を充実させるとともに、進路や人権に関わる情報について日頃から情報交換するよう努める。 ・保護者の知りたい情報を的確に把握し、提供する情報の内容やその提供の仕方を検討する。。
	総務部	○分掌業務、学級業務等の内容の見直し ○長時間勤務者の解消	○各分掌で業務の精選について検討しているが十分ではない。 ○学校行事の見直しと、担任、授業担当者が作成する文書の見直しが必要である。	・業務分担、業務の手順が整理されている。 ・月当たりの業務時間が令和2年度比20%削減。	・昨年度からの課題に絞って未来企画委員会において整理し、職員に周知する。 ・職員の見直しなど、来年度に向けて具体的に取り組んだ。 ・月当たりの業務時間が令和2年度より減少しなかった。	C	・企画委員会を中心にして、それぞれの課題について検討を進める。 ・学校行事や研修、文書作成など内容を精査し、効率よく業務が進められるよう努める。	

評価基準 A：十分達成 B：概ね達成 C：変化の兆し D：まだ不十分 E：目標・方策の見直し
【100%】 【80%程度】 【60%程度】 【40%程度】 【30%未満】